

[以下、原改訂版原稿]

基調講演：原 慶太郎（東京情報大学教授）

原：<スライド1> 皆さんこんにちは。東京情報大学の原と申します。本日は里山シンポジウムの講演として「英国のカントリーサイドからみた千葉の里山」というタイトルでお話をさせていただきます。ちょうど96年から97年までの1年間、機会があってロンドン大学のワイカレッジという所に滞在しました。そこでの経験等を踏まえまして、千葉の里山保全にイギリスの取り組みが何か役立てるのではないかと、ということで紹介したいと思っております。今回（シンポジウムが）我孫子市で開催されておりますが、恐らく千葉県の中でも都市型住民の割合が多い地域だと思えます。そういった方々が里山にどのような関わり合いをすれば良いのかなどのヒントをお示しできたらと思っております。

<スライド2> これが、私が滞在しました - イギリスのロンドンから電車で一時間ほど、ですから東京から1時間といったら千葉くらいをご想像して頂ければ良いと思えますが - その景色です。ちょうどこの辺に小さい村があります。ワイ（Wye）という村なのですが、そこにワイカレッジという大学がありまして、1年間滞在しました。ご覧頂くと分かりますように本当に広大な牧場と、この辺に点在しておりますのがヒツジですが、よくイギリスでは、ヒツジの人口じゃなくて、「羊口」の方が人より多いなんて言われますが、最近では人口の方が多いようです。桁数としては同じくらいのヒツジがいます。（この景色を皆さんが）どうぞ覧になるかですが、単調だなどご覧になる方もいらっしゃると思いますが、良いなどお思いになる方もいらっしゃると思います。こういった景色、景観がどのようにして作られてきたのか、どのように保全されてきたのか、その辺の所をお話したいと思っております。

<スライド3> 英語の「カントリーサイド(countryside)」ですが、辞書を引くと、「田舎」とか「地方」、「田園」という訳が載っております。これを最初に訳した方は何方か調べておりませんが、カントリーサイドに「田園」という訳が付いて大分イメージが変わったのではないかと思います。今日の講演を「英国の田舎と千葉の里山」というタイトルにしたなら、どれほどお出でいただけるか分からなかったと思います。残念なことにイギリスには田園はありません。それなのによく「田園」という訳語を付けたなと思う次第です。

日本でも過去に何度かイギリスのブームがあったかと思いますが、最近でいえばここにありますようにリンボウ先生こと林望さんですね。「イギリスは美味しい」をはじめとするイギリスのシリーズの著作や、最近ではイングリッシュガーデンなどのガーデニングなどがあると思います。さらにもう少し旅行通の方にはカントリーサイドというのもイギリスの大きな魅力になっているのではないかと思います。

<スライド4> たとえばこれは手元にあるものをコピーしてきたのですが、イギリス関連の本の中で、田園とかカントリー、それから田舎町なんてありますけど、こういうような数々のイギリス関連の本が出版されております。イギリスの魅力はカントリーサイド

にあるといっても良いのではないかと思います。

<スライド5> 今日はテーマが子供ということで、テーマを最初から子供に特化することも考えたのですが、主催者の方からもう少し広いテーマで、ということだったのでほとんど子供に関係の無いお話をさせて頂きます。最初と最後に少しでも触れたいと思います。たとえば恐らく皆さん自身がお読みになった、もしくは皆さんがお子様もしくはお孫さんに読んで上げたような「ピーターラビット」の話、「くまのプーさん」、など。これはいずれもイギリスのカントリーサイドが生み出した話です。「不思議の国のアリス」、これもやはりカントリーサイドが生まれるきっかけになったと言われております。

<スライド6> 最近では「ハリーポッター」でも、映画をご覧になる際にイギリスの色々な田園景観をみるのをひとつの楽しみになさっている方もいらっしゃるのではないかと思います。

<スライド7> それでは、なぜイギリスなのか？ 今日は物事をちょっと外から眺めてみようと思います。皆さんのなかには、谷津田や里山に入って色々活動されている方が多いと思います。それ自体非常に意義深いことですが、ちょっと引いて、相対化するっていいですか、そのような形で千葉の里山を外から眺めてみるのも、時には大事かと思えます。その外の視点を、今日はイギリスに置くという形で千葉を眺めてみたいと思っております。

<スライド8> イギリスと日本ですが、面積はイギリスが24万3千km²、日本が37万km²。人口密度は、イギリスが245人/km²、日本は337人/km²で、それほど違いはないように見えます。しかし、日本の居住できる面積を考えますと、日本というのは山国ですから住める所はほんとうに限られているわけですね。そういうことを考えると、この数というのは - 実際に旅行した方はお感じになっていると思いますが - 大分違って見えます。

<スライド9> 同じく（これはよく言われることですが）イギリスと日本の土地利用の割合をお示しました。やはり、先ほどご覧頂いた様にイギリスは牧畜の国です。牧場、それから牧草地がほぼ半数近く、45%ですね。それくらいの面積を占めております。それに対して日本は森林の国と言われるように3分の2が森林です。これが大きな違いです。

<スライド10> イギリスと日本に関しましては、色々と論考がされておまして、たとえばお読みになっている方もいらっしゃると思いますが、梅棹忠夫 - 大阪の民族博物館の前館長さんですが - 「文明の生態史観」という本で、日本と西ヨーロッパの共通性なり違いを論じております。

<スライド11> さらに鈴木秀夫ですね。「森林の思考砂漠の思考」という著作中で、両者の比較を行なっています。図があまり鮮明ではありませんが、森林破壊の時期と拡がりを示しています。こちら（左）がイギリスで、右が日本です。今日は私も午前中、里山と文化伝承の会に参加して色々勉強させて頂きましたが、過去に遡って、たとえばこれは現在から遡って千年、二千年、三千年ですけども、完全な森林破壊、それから部分的な森林破壊がどのように拡がったかを表しています。イギリスは、大陸から色々な勢力が押し寄せて破壊が進んだ訳ですが、ほとんど内部に関しましてはこ

の時期に、完全な森林破壊が行なわれています。それに対して日本は、 - 日本も弥生の文化が伝わった経路に関しては色々な説があるようですが - 、北から南にいくにしたがって徐々にそのような影響が及んでいることが分かります。

<スライド12> 今日の話ですが、里山をなぜ保全しなければならないのか、それから、里山をどうやったら保全できるのか、どう保全したら良いのか、について、先ほど申しましたように外から眺めてみるということで、イギリスの里山保全について、特にチョーク草地の保全を例に、イギリスの里山（カントリーサイド）の保全の取り組みについてご紹介したいと思います。景観の保全という枠組みですね。やはり見た目の景観を含めて景観を保全するというのにイギリスは大分力を注いでおります。それから伝統的な農業を守るという枠組みですね。これの重要さが色々な所で指摘され認識されていると思いますが、それに関してイギリスはどのような取り組みをしているのか。一つ注意していただきたいのですが、私は決してイギリスかぶれということではございません。よくイギリスに行った方で、イギリスは良いよ、良いよ、日本はダメだ、ダメだ、とそういう方が多くて一緒に話してもうんざりすることがありますが、私は決してそうではありません。日本大好き、千葉大好きなのですが、千葉独自の方法をぜひ皆さんと一緒に考えていきたいと思えます。私も明確な答えは持ち合わせておりません。こういう機会をいくつか利用させていただきながら考えていければと思っております。

<スライド13> 実はこの講演にお招きいただいたきっかけは、千葉環境情報センターの小西由希子さん、田中正彦さんたちが中心になって谷津田レンジャーという取り組みをなさっています。今年の2月、その講演会で、「チョークエスカープメントと谷津田」というタイトルでお話を致しました。その中で今お話したようなことを紹介したのですが、興味をもっていただき、今日、このようにお招き頂きました。

<スライド14> このチョークというのは、（実物を指して）いわゆる教員が黒板に書くときに使うチョークです。エスカープメントというのは急な崖のことをいうのですけれども、このようなところに辛うじて草地（半自然草地）が残っているのです。この上はほとんど牧草地とか畑になっております。下も同じように緑が見えますが、これは半自然草地ではなく採草地ですね。ここ（斜面）だけにいわゆる昔ながらの農業（牧畜業）が残っている。谷津田も、耕地整理されずに辛うじて残っている日本の原風景といえると思えます。両者のそのような共通性を踏まえて色々とお話致しました。チョークの話に移ります。このチョークは中生代の、今から1億3500万年前から6500万年前にかけて白亜紀という時代がありました。白亜というのはチョークのことですね。「白亜の殿堂」などの白亜も同様です。後程スライドでご覧に入れますがフランスからドーバー海峡を船で行くと白い崖が見えます。数十メートルもしくは百メートルを超えるチョークの層が堆積しているわけです。<スライド15> これがチョークの分布ですが、この一帯がチョークの見られる場所です。<スライド16> ちょっと専門的になりますがこういった微生物の遺骸が堆積してきた石灰岩、これがチョークといわれるものです。

<スライド17> 今日のお話はこのロンドンから南東に1時間ほど行ったところのワイという小さな村の話です。ちょうどこのユーロスターの場合は、フランスのパリから、もしくはベルギーのブリュッセルからも鉄道が通っており、アシュフォードという停車駅で降ります。そこからちょっと行ったところがワイです。<スライド18> これがランドサットの衛星画像ですが、これをご覧になると、ロンドンは住宅地が広がっていて、(日本のデータをお示しできないのですが)ロンドンに行かれた方はわかると思いますが、大きな公園があります。ほんとうにロンドン中心から15分、20分行くと、このようなカントリーサイドが広がっているんですね。これがロンドンの市街地ですけど鉄道で15分から20分行くとカントリーサイドが広がっています。

<スライド19> チョーク草地というのは伝統的な牧畜業、いわゆるヒツジの放牧ですね、これによって維持されている草地です。いくつか植物もご覧に入れますが、非常に種多様性が高く、生態学的研究の対象にもなっております。しかしながら1960年代、イギリスの農業を取り巻く環境の変化で耕作地や採草地に変化し、その一部は戦後から始まっているわけですが、このような変化が起こります。<スライド20> ここにはグレイジングといいますけど、ほんとにヒツジはぎりぎりまで草を食べるわけですね、このグレイジングによって草を刈ることによって維持された短い草の草地があります。そこに適応した植物が見られます。ホースシュー・ベッチといいますけど、マメ科の植物です。チョウというのはこの中にもお好きな方がおられるかもしれませんが、だいたい同じ種類の植物しか餌にしないものなのですが、このチョークヒル・ブルーという非常に可憐で綺麗なチョウですね、このチョウはホースシュー・ベッチしか食べないんですね。そして、この植物は草丈の低い草地にしか生えないのです。そうするとたとえば、放牧をやめると、草丈が大きくなってこの草がやがて枯れてしまう。そしてそこからこのチョークヒル・ブルーがいなくなる。このチョークヒル・ブルーというチョウはこの地域の人にとっては非常にシンボリックな、日本で言いますとギフチョウとかオオムラサキくらいの、もしくはもっとポピュラーなチョウでして、これがいなくなるということはその地域の人にとって非常に大きなかけがえのないものを失うということになる、ということで保全運動が起きてきました。<スライド21> 今残存するチョーク草地というのは先ほど写真でお示しましたような、上は畑、下は住宅地といった丘陵地の袖の急傾斜地(エスカープメント)にしか残っておりません。そこを景観として、この場合の景観というのは、見た目も含まれますけど幾つかの生態系の集まった実体としてのまとまりを景観といいます。その景観を生態学的に保全しようという取り組みがなされました。先ほどお示しましたワイという地域なのですが、ワイダウン丘陵地なんですけど、ここはナショナル(国レベルの)自然保護区域で、自然保護庁(イングリッシュ・ネイチャー)という組織が、積極的な維持管理をしています。NPOと協働して牧畜農家と契約して、採草地ではなくて、伝統的なヒツジの放牧をして利用してもらう。これはお金も手間もかかるのですが、これをやっていただくことによって草地を保全しようという取り組みがなされています。後ほど写真で実際の

様子を紹介したいと思います。〈スライド 22〉 ここから読み取れますのは、伝統的な牧畜業の持続、日本で言いますと伝統的な農業の持続、これを政府が積極的に推し進めていること。それから、景観の保全、伝統的な農業、または伝統的な牧畜が行なわれている所は、たとえば寺院とか社寺、神社とおなじような文化的な景観であるという認識です。カルチュラル・ランドスケープといいますが、これを保全する。さらにさきほどのチョウが減ったというようなことですが、これが全てデータとして示されておりまして、すなわち、それぞれの地域で詳細な生物の調査、インベントリーが行なわれておりまして、具体的にどこで何頭いたものが何頭減ったということが示されています。今日の最後のところでもふれる予定ですが、そういった行政、NPO が連携した取り組みがなされています。これは非常に参考になる事例だと思います。

それでは具体的な絵をご覧にならないとイメージがわからないと思いますので、写真をお示ししたいと思います。ちょっと画像が暗いのですが、これがワイダウンというところですよ。チョーク草地ですので草をはくと白い岩が出てきます。これはワイクラウンというモニュメントです。これは一部白石を使っています。こういった場所が今日の舞台です。これは私がいました研究室の窓から見た景色です。こういうところにある大学ですので毎日こうやって移り変わる外の景色を眺めておりました。これはヘッジロウという垣根です。ホーソン（セイヨウサンザシ）というバラ科の植物なんです、昔の三圃式農園の囲いで、畑と畑を区切っています。このヘッジロウを保全しようという取り組みがイギリスでは行なわれております。このヘッジロウが野生生物の棲家となり、さらにはこちらの大きいハビタットとハビタットをつなぐコリダー（生態的回廊）としての役目を果たしているということで非常に注目されている場所でもあります。

いくつかの林の絵をご覧頂きます。先ほどお示しましたように、イギリスは 10% くらいしか森林面積がありません。林業などはほとんど成り立たないのですが、いろんな形で合同事業を進めて森林を管理しています。これは小さなクリの林です。こういった小さい栗がなります。私も食べてみましたが甘い美味しい栗です。ここではいろんな遊具が作られておりまして、これは当時 5 年生の娘と幼稚園年長だった息子です。いまは大学生と中学生で、ぜんぜんいうことを聞かなくなりましたが、その当時は一緒に行こうというと、二人とも一緒についてきていろいろなカントリーサイドをまわりました。これはプリン・ウッズ（Blean Woods）という森です。イギリスはフォレスト（forest）というのは特別な意味をもたせています。ウッズ（woods）というのがいわゆる森のことです。RSPB と書いてありますが、これは日本で言う野鳥の会、王立の鳥類保護連盟ですね。こういったところが土地を買い取ったり補助金を出したりして、森を守っている。野鳥の会が森を管理しているということになります。他にもいろいろな組織がこの活動と一緒にやっている。これはブナです。こういった大木もありますがここはほとんど原生林ではないですね。一度なくなった後にできたもので、いわゆるエインシェントフォレストとよんでいるもので

はありません。たとえばワイルドライフトラスト、そういったNPO、自然を保全したり野生動物を保全したりするようなグループが、いろんな形で管理していました。こういった案内を立てたりですね。

先ほどのクリの林ですが、これが冬の景色です。ちょっとご存じの方は、これは萌芽林だなということはすぐお分かりだと思います。いわゆるコピスと呼ばれるものです。15年くらいを1サイクルにして、地際からもしくはもうちょっと上から刈る場合などもあり、いろいろやりかたがあります。こういった形で森林を管理しています。

ホスフィールド・コモン(Hothfield Common)というちょっとした湿地があります。そこをアシュフォード市とケント・ワイルドライフ・トラスト - これは野生生物を保全するNPOです - こういったところがいっしょになって市の保全地域を保全管理しているということです。こういった場所かといいますと、イギリスは結構寒冷ですから北に行くといろんな湿地があるのですが、南部としては珍しくミズゴケの湿地が発達しています。ミツガシワなども見られます。後ろに見えますのがシラカバとワラビです。このワラビが増えて湿原を脅かすので、刈取りなどの保全管理をしております。この辺の一部にはヒースに見られるようなツツジ科の植物も見られます。こういう状態でどんどん乾燥化がすすんでいますので、ワラビの刈取り - 日本で言えばさしずめクズの刈取りなどにあたるでしょうが - をやっています。

それからイギリス人というのは歩くのが大好きなので、ケント州にノースダウンという丘陵地があるのですが、ロンドンからドーバー海峡までずっと遊歩道がつながっております。103マイル、166kmずっと歩いていけるんですね。ここから16kmでカンタベリー、45kmでドーバーです。パブリックフットパスという私有地を通行する権利を市民が勝ち取ったんですね。遊歩道が至るところに整備されています。

これは97年2月14日の窓から見た景色なのですが、実質は緑緑している景色です。むこうの芝生は日本の芝(コウライシバ)とは違いまして、青々とした常緑の芝なので、夏目漱石が100年前にロンドンに行って、結構鬱屈して過ごした、という手記があるのですが、こういったどんよりした雲が2週間くらい続くんですね。日本だと、私は山形の出身なのですが、冬は曇った日、雪の日が多いのですが、それでもだいたい三寒四温で3日待つだいたいいい天気になり太陽が顔をだしました。ここでは2週間、ほんとに太陽が見ることができませんでした。私も大分精神的に参りました。

季節を追ってご紹介しますが、そうしてしばらくしますと、さきほどは2月ですが、最初に咲くのがスノードロップという花です。非常に可憐な花です。こういったところに咲いているのかといいますとちょっとした教会の墓地の脇ですね、ここに白く見えますのがスノードロップです。これはワイの村をさきほどのクラウンのほうから見たところ。ほんとに広大な、と同時に丘陵が低い、なだらかな地形だということがわかると思います。これは氷河の影響なので、丘陵のほとんど上部まで草地とか畑に利用できるということが、逆に言うと森林面積が少なくなる原因にもなっています。日本の場合はここ

から急激に上がりますから、そういったところには昔は決して住まなかったし、畑にも（段々畑にも）利用しなかったわけでそういったところには森林が残るわけです。イギリスの場合はこういった形でほとんど利用されつくします。

ここからさきほどの青々とした芝生がだんだん変わっていきます。スイセンがこういった形で咲いております。冬になると桜草の花が咲き、カウスリップという桜草の仲間が咲いてきます。だんだん春になってきますと、ちょっと見えにくいですがヒツジが草を食んでいます。この黄色く見えますのが菜の花畑です。一面菜の花畑になっておりまして、油をとったりしています。これは花粉症の原因にもなるようで、嫌われたりもしております。5月くらいになりますと、ちょうど今頃ですね、イギリスに行く際には今頃が一番いいと思います。これはブナの二次林ですが、ブルーベルという、ヒヤシンスみたいな小さい背丈の花が一面咲きそろって、ちょうど東北で言いますとカタクリがこういった形で早春植物として咲き誇っていますが、ちょうどそういう感じです。前にごらんいただいたクリ林の林床です。ちょっと鮮明ではありませんが、ヒヤシンスによく似たブルーベルが一面咲いています。そのほかに同じような早春植物のアネモネなどが見られます。伐採跡に行きますと日がよく当たりますから、ブルーベルがこのような形で咲いているのがわかります。

これは少々人工的な話ですが、イングリッシュガーデン、庭園の話に移ります。これはシッピングハーストという庭園で、ナショナルトラストが管理しています。会員になりますと無料もしくは安価で入園できます。

これがドーバー海峡です。こういった形で崖が何十メートルもチョークの堆積した地層になっています。さきほどのチョーク草地が発達しています。崖下に行きますと白墨を固めたようなもろい岩です。むかしはイギリスでは先生が黒板で使っていた。森林のほうを見ますとこういう形でチョークの上にくっついてあります。これがワイダウンという保護区です。こういうところをイングリッシュネイチャーという組織が借り受けて管理しています。これが畑です。畑はチョークで真っ白です。ワイダウンは国の自然保護区になっています。これが遊歩道で、勝手にあけて入っていいのです。これが下から見たところです。ヒツジが食べている短い草の様子がわかると思います。そこにこのようなラン（ピーオーキッドといって蜂に擬態したラン）、マツムシソウやアザミの仲間とかキキョウの仲間などが見られます。これがホースシュー・ベッチという、先ほど紹介したチョークヒル・ブルーというチョウの食草です。ホースシューというのは蹄のことなのです。ここ（果実）が蹄の形をしているのでそういいます。これは背丈の高い草地です。こういうふうに入れないといわゆる放棄水田のようになってしまい、ここにはホースシュー・ベッチは入れないですね。したがって常にヒツジを放して短くしておかないといけません。

秋の景色です。これは雑草なのですがポピーです。7月末になると、このような景色で緑色していた所が茶色の景色に変わって一年が終わります。向こうの学校は8月、9月から始まるのですが、日本は稲のサイクルにあわせて4月、向こうは麦のサイクルに合わせて8月というのが毎年の開始です。そんな形で一年を過ごしました。

<スライド24> イギリスの農業と環境の関係について残りの時間でお話ししたいと思います。

<スライド25> ビクトリア女王は1837年に即位するわけですが、この当時は農業に依存していました。そして、1851年には人口の半分が都市にだんだん移っていくわけですね。1901年、都市の人口が4分の3になりました。このころからカントリーサイドの衰退が目立ち始めるわけです。<スライド26> ビクトリア時代というのは、ちょうどイギリスが世界制覇に邁進したころですが、工業化の発達で人口が都市に集中しました。カントリーサイドというのはエステートという荘園をファーマー(農業経営者)が借り受けて、それをコテッジャー(農夫)という小作に貸して、その契約が終わればコテッジャーという農夫はどこかに行ってしまいます。<スライド27> それに対して日本は、村を構成しそこに住み着くのを理想とした。こういったところが、放牧民と水田と基幹とするような人々の違いかな、と思ったりします。<スライド28> 先ほど4分の3が都市に移ったと申しましたが、この時代、都市人口の割合は、イギリスは変わってないですね。日本の場合、1920年からの統計ですが、戦後、いわゆる高度成長期に急激に都市化しているわけですね。これは100年前のイギリスとまったく同じですね。これが日本の里山に不幸をもたらしたと考えることができます。

<スライド29> イギリスは戦後、全国土地基金というのを作りまして、遺産相続税を土地や歴史的建造物を取得することで、いわゆる物納することで、ナショナルトラスト、有名なNPO組織が作られたわけです。そして土地農村計画法でグリーンベルトをつくる、この時代にそういう計画的な政策を行なった。自然管理委員会や国立公園、もしくはカントリーサイドのアクセス権法、ここでは、エリア・オブ・ナチュラルビューティ(AONB)といいますが、自然の景勝地、景観の優れた場所をAONBという形で指定して保全するような動きが、第一次世界大戦後まもなく始まっているわけです。<スライド30> つづいてカントリーサイド法が1967年に成立して、里山の自然美の保護と増進を図り、公衆のアクセスを奨励・健康増進のためにアクセスを奨励・することになりました。カントリーサイド・コミッションというのを作りまして、保護に乗り出しました。もうひとつ、自然保護協議会ができていろんな自然を、もしくは学術的に貴重な所をSSSI(特別科学研究対象地域)に指定して保全・研究することになりました。それから60年代に自然保護運動が occurred。ナショナルトラストやさきほどのRSPB(王立鳥類保護連盟)が自然保護運動に乗り出しました。とくにこのRSPBの中の農業野生生物技術者指導グループ(FWAG)というもの中心になっているんな運動の中核になったということです。<スライド31> それで野生生物田園地域法に則って、野生生物を保全しようということで合同調査をし、農業法を改正して環境保全型の農業に変わってきたわけです。たとえばスチュアードシップ・スキームという事業を始めまして、カントリーサイドの管理人になることに対して補助金を支払う。この保全地域事業というのは、当該地域が国民的に見て環境

的に重要である、もしくはいわゆる伝統的農業を奨励することが環境破壊を阻止するのに役立つ地域である、具体的かつ一貫した環境保全の対象となる地域的単位となっている、ということで保全地域事業が始まります。〈スライド33〉 さらに80年代90年代になりまして、条件不利地域農業対策事業が始まります。それから硝酸塩監視事業、これは最近千葉でも少しずつ話題になっていますが、窒素の問題というのは向こうでは大きく取りざたされているわけです。それからNPO方面に対しての助成、森林に対しての助成等が次々と打ち出されています。イギリスの農場政策は効率的農業、急速的農業を目指しています。向こうは一戸あたりの面積が非常に広いんですね。したがって、統計を見ても、日本の場合は2ha以下を細かく0.5ha単位で切るんですね。向こうは5ha以上から始まるので一緒に比較できません。ですから、これは向こうだからできることかもしれません。

〈スライド34〉 農業環境の保全ということで、先程申したように環境保全農業活動を実施する包括的事業になります。インセンティブを提供する。農業と環境を統合する、クロスコンプライアンスといいます。直接支払いを前提として、その支払いに環境条件を付加するというような政策を行っております。一方EU共同体の一員ですので共通の政策、枠組み取り組み、もしくは規制の場合もありますけどもそういったことも併せて行なっています。

〈スライド35〉 イギリス人は里山が大好きなんですね。先程示しましたように、アシュフォードというユーロスターの止まる市と、先程の人口1000人位のワイという小さい村とですね、アシュフォードよりもワイに住んだほうが、たとえば住宅なんか高いんですね。アシュフォードのほうが安いのです。したがって、人びとの気持ちとして、やはりカントリーサイドに住みたいということがあると思います。また、フットパスというのが整備されてパブ(居酒屋)ですとかイン(民宿)、こういった所に寄りながら歩く。あとは一度失われた自然に対するいろんな憧憬等があるように思います。

〈スライド37〉 そろそろまとめないといけないのですけれども、里山を保全するときに、どういった切り口があるかといいますと、私は文化まで高めないとなかなか守れないのではないかと、思います。〈スライド38〉 それと、自然との付き合い方も、風土にあわせないといけないのですが、いろんな場所にあった付き合い方というものがあるはずで、それを一緒に模索しないといけないと思います。

〈スライド39〉 たとえば江戸時代では、いろんな所で言われていますが世界に誇るリサイクル社会でした。どこかが間違ってしまったと思うのですけれども、これ(米国型生活様式)が、いろいろ悪さをしているのではないかなと思っています。米国型生活様式は、日本の風土に合わない。見習うべきは欧州であって、たとえば京都議定書の時にでも、二酸化炭素の削減率も、アメリカとヨーロッパの間をとるのではなくて、もっとヨーロッパよりの値を出すべきだったと思います。まあその辺は置いておきますが。やはり、新しい時代の生活様式を一緒に考えていかないといけないと思います。〈スライド40〉 明

治時代以前、これは江戸時代ですけども、英国の駐日公使のラザフォード・オールコックという人は、行った所が江戸近辺だったのでしょけれども、「このよく耕された谷間の土地で人々が幸せに満ちた良い暮らしをしているのを見ると、これが圧政に苦しみ、過酷な税金を取り立てられて苦しんでいる場所だとはとても信じられない。ヨーロッパにはこんな幸福で暮らし向きの良い農民はいないし、またこれほど穏やかで稔り多い土地もない。自分の農地を整然と保つことにかけては、世界中に日本の農民にかなうものはない。」と、こう言っているのです。これに対しては、事実、「おしん」の例もあるようにすごく苦しいところもありました。しかしながら一方でこういうところも多かったようなのです。それがいろんな形で「昔はひどかったですね」というようなそういう言い方をされている、という主張をなさる方もいます。

<スライド41> 日本人がどこで間違ったか。これは私見ですが、明治以降のいろんな動きですね、それから農地に関しては戦後のいろんな近代化といわれる政策、たとえば「コクド」に代表される問題でもいろんな影響があると思います。もうひとつは、これは私がイギリスに一年いて一番感じたのはこのことです。「個」を確立しないと、極端な言い方をすれば民主主義もないし、これから議論になるのであろうパートナーシップも成り立たないと思います。一方では、最近の動きを見ると「個」、「個」という自己中が増えた、という議論があるかと思いますが、あれは中途半端な「個」で本当の個が確立していないように思います。これは私の見方なのですが、「個」を大事にして公を探るとというのが道筋だと思います。<スライド42> 数学者の藤原正彦さんが、「英国は9世紀までに繁栄を極めた、富、成功、地位、名声といったものを手に入れた、そして人間を本当に幸せにしてくれるのはそういうものじゃないということを知っちゃった。アメリカ人はまだ若いという眼で見ている、自分たちのビクトリア時代、100年前くらいだと思っているんじゃないですか。」と言っています。その通りだと思います。

<スライド43> さて、千葉の農業です。谷津田景観ですね。私自身も中村俊彦さんと谷津田フォーラムという活動をやっていますので、これはちょっと触れておかないといけないですね。谷津田景観がどうなるのか。これは千葉の里山保全のひとつの試金石になると思います。もちろん里山とか雑木林も含めた意味での景観です。先程申したように、谷津田は耕作不適地なのですが、不適地というのはいわゆる経済的に見たらなかなか大変なところなのですが、生物多様性の保全など重要な役割も果たしている。やはり先程のイギリスの農業政策に学ぶと、いろいろな形で守っていかなければならない。里山に行って感じて考えて行動する、自分を見つめることになる。先程申したように、自立した個同士の相互の関係、パートナーシップが大事です。それを文化にまで高める。やはり「こだわり」だと思います。

<スライド44> もう一度述べますが、農業従事者、住民、NPO(というのはなかなかこなれない訳なのですけど)いわゆる仲間ですね。仲間、研究者、行政、とくに自立した農業従事者、住民、仲間、研究者が一緒になって取り組んで、行政は、なかなかいい言

葉が見つからなかったのですが、弾力的かつ柔軟に、いわゆる縦割り無しにということもあるのですが、こういった形の取り組みによって解決していかないといけない問題でないかと思います。これからの時代というのはそれぞれの主体の力量が問われる、そういう時代になると思います。

<スライド45><スライド46> 「かつて子供であったことを忘れずにいる大人はいくらもない」というのは星の王子様のサン・テグジュペリの言葉ですね。私の大好きな言葉です。みなさん、かつて子供だった頃のことを自分が思い出して、どうすればいいかと考えると、おのずとやらなければいけないことというのがわかると思います。<スライド47> 先週の朝日新聞ですが、新宿にお住まいの習字の先生が「田圃」という字を教える時に、田圃そのものを知らない子供が多かったというのです。行ったことがないと。ご飯は知っているけども、稲からとれているということを知らない子供が多かった。これはほんとに驚くべきこと、由々しきことだと思います。<スライド48> ここにいらっしゃる佐倉市の小野さんが取り組んでいらっしゃる手繰川の親水工事の現場なのですが、これがその場所で会った子ども達です。これは私が自転車で通りがかって遭遇したのですが、非常に礼儀正しいしっかりした子供でした。これだけ泥んこになって遊んでいる。ほんとうに僕はうれしく思いました。

<スライド49> 中村さんが「里やま自然誌」という本を出しまして、一番初めにこういうことを書いているんですね。「うさぎおいしかのやま こぶなつりしかのかわ」の歌ですね。これが中村さんの原体験だとおっしゃっています。古里、皆さんお持ちだと思いますが、私は山形の米沢というところが古里なのですが、千葉に住んでいるほうが、ちょうど今年が境なのですが、もう多くなりました。代々千葉に住んでいる人、新しく千葉に転入してきた人が誇りを持って、古里といえるようなそういったところを作っていかなければならないと思います。<スライド50> それには、原体験を共有するって大事だと思いますね。それがないとイメージがもてず、なかなか構想できないですね。古里と里山のプロジェクトを一緒にしたのは、そういう形で千葉の里山を考えていきたいという思いからです。

<スライド51> 最後なのですが、柳田国男の、「村は住む人のほんのわずかな気持ちから美しくもまずくもなるものだ」という言葉で締めくくりたいと思います。今日来ていただいた方は、おそらくすごくいい気持ちをお持ちの方で、それを実践している方が多いと思いますが、そういった輪を少しでも隣の人に広めて、千葉の里山、千葉の環境、美しき千葉にしていきたいものだと思います。

どうもご静聴ありがとうございました。